［制作記録］

オリジナルテキスタイルによるスカーフデザイン

大　野　　悠

はじめに

学生時代から織物を始め、その当時は自分で布を織り上げることに専念し、素材の温かさと表情の豊かさに魅了されながら制作を進めていた。卒業後勤めた会社では、学生時代の経験を生かすことができる部署に配属され、素材選びから織物の設計などを考えオリジナルの布を企画するというやりがいのある仕事に恵まれた。学生時代との大きな違いは布の生産現場と連携しながらモノづくりをすることで、それを経験できたことと、職人との出会いは一番の財産だと感じている。

産地ごとに特化した生地づくりを行う国内の現場は、和装が主流だった時代に引き続き、現在もなお緻密で繊細な仕事を得意とする。使用する素材、糸の太さ、撚りの回数、織る時の糸の並びや密度、テンション、仕上げ方など、微妙なバランスの違いで仕上がりが大きく変化する。それゆえ手を抜くことができず大変奥深い。単純に細くて繊細、というわけではなく、肉厚だったりざっくりした布でも、日本の布には繊細な気配りが見てとれる。日本の布が評価される理由は、そのひとつひとつの工程に対するこのような配慮があるからこそだと感じる。

今回オリジナルのテキスタイル企画を進めるに当たり、これらをふまえて考察した経緯を報告する。

織物の制約

そもそも織物はタテ糸を張る為に多くの時間を要する。何百から何千という糸を、反物分の長さと本数を測りながら整列させていく（整経）。測ったタテ糸を一本一本「綜絖」という数ミリの穴に通していく。もしくは繋いでいく。その後、「筬」という櫛のような部分に、やはり一本一本通さなければならない。各工程につき何百から何千という本数の糸を処理していくのだから、相当な忍耐力を必要とする。気の遠くなるような工程が続き、ようやく製織にかかることができる。手織りにも機械にも共通して言えることだが、織物制作の中でタテ糸を織機にかける工程が一番大変な作業である。

今回の企画では、このような織物特有の制約に配慮しながら効率を良くするために、2つのデザイン「potsu potsu scarf」と「shima shima scarf」のタテ糸を共通で使用することにした。ただ、デザイン性に差を持たせる配慮を徹底させ、見た目は全く違う印象のものに仕上げるように計画した。タテ糸に使った糸は21デニールを2本合わせた絹糸。髪の毛より細く繊細な絹糸である。そしてそのタテ糸に打ち込むヨコ糸はそれぞれの企画で差別化した。ヨコ糸を変えることはタテ糸を変えることに比べれば比較的容易なこと、ヨコ糸の違いにより布の厚みとテクニックに変化を持たせる。

その他、今回配慮した点は染色コストを削減するため、使用量の少ないウールの糸に関しては、紡績工場が常にストックしている染色糸のサンプル帳からピックアップした。今回選んだラムズウールの糸は、本来主に横編み用として使用する糸で、織物用の糸に比べると糸値が高く撚度が甘い。強いテンションをかける織物の特にタテ糸用としては、強度が足りない等の物性的な問題が発生することもあり、一般的に織物製品としての使用は避ける傾向にある。しかし今回のような多色使いでありながらも小ロットでヨコ糸のみの使用というケースでは、染色を依頼するより割安で物性面もクリアでき、しかも風合いが良いという理由から、使用する価値があると考えた。選んだ糸はトップ（わたの状態で染色し、複数

の色を混ぜながら糸を紡績する方法で、霜降りに仕上がり、色に深みや立体感が出る）で豊かな色合いが美しい。染色糸量5kgや10kgなどという満たすべきロットを満たさずとも、最小限に抑えることができた。
このような糸選びや織物テクニックを検討する際、信頼する糸商や織物工場の方とのコミュニケーションなしでは進めることはできない。あるものだけを使うのではなく、出来ない事を貫くでもなく、ものづくりの現場と実現させたい企画をいかにすり合わせていくかが最大の山場でもあり醍醐味とも言える。テキスタイルを企画するに於いて、織物だけでなく繊維を扱う上での様々な制約やルールを知ることで、コストの面から配慮することもでき、さらにこだわりを徹底させることもできる。

potsu potsu scarf　素材：silk・lamie・wool
細い絹のタテ糸に対し、ヨコ糸には着物の上布に使われる苧麻の細い糸を使う。その糸に追撚（メーター何十回、何百回と撚りを加えること）し、強撚糸（撚りの強い糸。撚りの効果で糸が縮もうとしシボの効果を持たせることができる。和装でいう縮みや縮緬に使われる。）を作る。追撚の回数が少し違うだけで仕上がる織物の表情は大きく変わる。そこにも職人とのやり取りが生きてくる。その糸をヨコ糸として打ち、生地に独特の表情としっとりした肉感を与えた上で、ジャカード織機の特徴と組織を駆使し、ウールフェルトのポツポツした意匠を加える。むす苔に光るしずくのイメージ。

shima shima scarf　素材：silk・wool
絹の細い強撚糸をヨコ糸に打ち込んだ透明感のある地と、ざっくりとしたウールの組み合わせが、新しい風合いをもたらした。表情の豊かなshima shima。イレギュラーな縞構成に加え織組織による変化をつけ、さらに奥行きを持たせた。上品さと温もりを損なわぬよう、配色展開させる際の色彩バランスに配慮した。見た目は重厚感がありそうだが予想に反して軽く、さらにラムズウールの柔らかさがますます風合いの良さを引き立たせる。

職人との布づくり

自分自身のテキスタイル企画に際して続けていきたいことが、そういったいわゆる「職人」が存在する生産現場との共同作業だ。職人と話し、理想の密度や素材使い、柄のイメージ、制作意図を伝えながら、話を詰めていく。相手からも色々なアイディアが出てくる。ひとつひとつの課題をクリアーしながら布がイメージ通り、もしくは期待以上のクオリティに上がっていく度に感動がこみ上げてくる。それは自分の手だけではなしえないものづくりであり、職人の繊細で緻密な技術と知恵があってこそ完成する。今回織物とは別に企画したフェルトによる「tun tun muffler」「en en muffler」では、日本のたなばた飾りのシャープな美しさと立体感を利用したテキスタイル作りを計画したわけだが、使用するフェルトは、以前から気になっていたフェルト作りを得意とする職人に依頼。より立体感を出すために表裏の色を変え、さらにフェルトの風合いにこだわりを見せる等、試行錯誤を経て職人の勘と技術が光る仕上がりとなった。現場にとって、こういった仕事は時間がかかり、決して儲かる布づくりではないが、それでも「出世払い」といいながら私の布づくりに付き合ってくださる。「面白くない企画をもってきてもやらないぞ」とプレッシャーをかけてくれる。デザインをする側と技術をもつ現場が、お互いの良さを引き出し、刺激しあって新しい可能性を探ることが私のモノづくりのコンセプトであり、本物のスペシャリストたちとともに布に命を吹き込んでいく姿勢で仕事に携わりたいと思っている。
（付記：本作品は平成19年度奨励研究の成果である）

（おおの・ゆう　ファッションデザイン／テキスタイル）

potsu potsu scarf

• Colors

koke

hotaru

yuki

• Quality
Lamie
Silk
Wool

• Size
50×170cm

shima
shima
scarf

Quality
Silk
Wool

Size
50×170cm

Colors

iroiro

yoru

yushi

yuki

yuoono

tun
tun
muffler

◇Colors

yuki

tsuchi

himawari

hi

fuji

◇Quality　Wool
◇Size　20×160cm

en en muffler

○Quality　Wool
○Size　30×160cm

○Colors

yuki

tsuchi

himawari

hi

fuji

yuoono